

法然・親鸞両祖の得益論

葛野洋明

序

親鸞聖人の教学を明らかにするために、その師法然聖人の教学を伺うことは必要不可欠である。両祖の教学にどの様な相違点があり、またどの様に関係しているのかを伺うことによつて、より明らかになるものと思われる。

両祖の得益論のなか、特に現生に於いて得る益、いわゆる現益についてその相違点、またどの様に關係しているかを伺い、両祖の得益論を明らかにしていく。

一 法然聖人における現益

親鸞聖人が主著『教行証文類』に証文類、真仏土文類等を顯して証果を明らかにしたのに対して、法然聖人には現益に限らず当益を含めて、証果・得益に関する記述は少ない。しかし『選択集』讚嘆念仏章に「五種嘉肴」「二尊影護」を現益とし「往生成仏」を当益と著し、道綽禪師の始終の両益を

引用して、現当二世に亘る得益を明言している。

さてその中、現益を概観すると「護念」「滅罪」「撰取不捨」「不退」「見仏」「三昧」等が伺うことができる。「護念」は『選択集』護念章に「六方諸仏護念念仏行者之文」として、勢至観音諸仏諸天神までも護念を受けるとあるのを始め、撰取章や讚嘆念仏章においても言及され、『小経釈』にも聞経による護念が積されている。「滅罪」は『観経釈』の華座観、像観、観音観、勢至観を積す中に滅罪の益を受けるとあり、「撰取不捨」は『選択集』撰取章に「弥陀光明不照余行者唯撰取念仏行者之文」として『観経』の撰取不捨の語を出し、讚嘆念仏章には道綽禪師の始終両益を引く中に撰取不捨とある。また『念仏要義鈔』には撰取の利益を受けるのは平生か臨終かを問答し、平生から最後まで捨てないと説かれている。「不退」は『小経釈』に護念不退菩提の益を受けるとあり、「見仏」は三輩章、念仏付属章、「観経釈」にあり、特に真身観の利益として説かれている。「三昧」は『三昧発得

記」にある如くである。

二 親鸞聖人における現益

法然聖人の教えを継承する親鸞聖人の上にも法然聖人が顕した現益の殆どが伺うことができる。概観すると「護念」と「滅罪」は『現世利益和讃』に見られ、「見仏」は『尊号真像銘文』に『首楞嚴經』の文を釈す中に「今生に仏を見たてまつり」とある。また「撰取不捨」は行文類の行信利益を始め『正像末和讃』等の和語聖教の各所に見受けられ、「不退」も同じく六字釈を始め数多く説かれている。「三昧」については言及されているところを見いだせないが、法然聖人が言及しなかった「正定聚」に重きをおいて説いている。

親鸞聖人の現益についてはこの様に種々説かれ、『現世利益和讃』に「この世の利益きはもなし」といわれるが、これらをまとめた形で信文類に現生十種の益が挙げられている。その十益については古來入正定聚の益を総益としている。

この総益である入正定聚の益こそ親鸞聖人の己証であるとし、ここに法然聖人には見られない現生正定聚という親鸞聖人独自の得益論が見い出せるといわれている。しかしただ単に現生で正定聚を語った事だけが己証なのではなく、その正定聚を便同弥勒、如来と等しとするところが特徴であり、これこそ親鸞聖人の己証と言い得るのである。

三 両祖の現益について

法然聖人における現益の殆どを受けながら親鸞聖人は現生正定聚という己証を發揮し、そこには便同弥勒、如来と等しという特異な發揮があった。その特異性は全く法然聖人の上には見られないのであろうか。

「安心決定鈔について」加藤義諦編によると詳細に論じて「如来等同思想は親鸞独自のものとされてきたが、広義的には師法然に淵源し……」（六三頁）と結論されているが、法然聖人に淵源があるとするとその根拠として『漢語燈録』逆修説法の第三七日に光明の功德を述べる中、清浄光によって持戒でない者が持戒清浄人に均しくなり、歡喜光によって忍辱の人に同じとなると述べられていることが挙げられている。この「均し」と「同じ」の語によって如来等同思想の原型とされているのである。

語句の上ではなく、如来と等しの論理的根拠を伺うとそれは便同弥勒であり、その便同弥勒は信心が証大涅槃の真因である事から言い得るのである。つまり信心によって臨終の一念に涅槃を超証するという往生即成仏の義によるのである。

信心により臨終に必ず大般涅槃を超証するから、等覚であり一生補処の弥勒と同じと言い得るのである。この様に親鸞聖人の往生理解が現生正定聚、便同弥勒、如来と等し

の根拠となっているのである。

往生理解について法然聖人を伺うと『西方指南抄』法然聖人御説法事に「かの安楽不退のくにむまれて、自然に増進して仏道を証得せむ」とあり、同じく念仏大意を伺っても浄土を不退の土とし、修行の場として見ている。また『選択集』三心章には「今建立二種信心決定九品往生也」とあり『和語燈録』三経釈に「かの国に九品の差別あり」などとあり九品の往生を説いている。反面九品を否定する文もある。

しかし法然聖人に於いては浄土を不退の土とし、即成仏の義はみられない。特に九品往生を説く中、上品上生を願われている事が明らかである。そして上品上生を願われる理由としては『西方指南抄』の鎌倉の二品比丘への御返事に「極楽の上品上生にまいりてさとりをひらき、生死にかへりて誹謗不信おもむかへむ」とあり、衆生利益せんがために上品上生を願われていたのである。

浅野教信教授によると、上品上生を願生していることは衆生利益の為に生死に還り、完全なる利他行をする為であり、しかもその完全なる利他の活動は証りを得て後であるので、上品上生即成仏の見解に立っているのではないかと推察されると指摘されている。

これは法然聖人の上には浄土を不退の土とし九品往生を説き、明確な往生即成仏義は見出されないが、衆生教化のため

に上品上生を願われた点に、往生即成仏義の思想の淵源あるいは萌芽がある可能性を示している。

ここに往生即成仏義の萌芽を法然聖人の上に認めるとすると、便同弥勒、如来と等ししの思想的萌芽が法然聖人の上にも伺うことができるという可能性を示すことになるのである。

結

法然・親鸞両祖の得益論について現益について概観し、両祖の現益における同異を伺うことよって、親鸞聖人の現益についての己証である現生正定聚、便同弥勒、如来と等し等が法然聖人の文言の上には明確に見出しがたい發揮であったことがより明らかとなった。

しかしその思想の論理的根拠とされる往生即成仏義が法然聖人の上にも伺い得る可能性があるとの指摘により、便同弥勒、如来と等ししの思想も法然聖人の上にも、その思想の論理的淵源、萌芽を伺い得る可能性があるかと推論することができるとことが明らかとなったのである。紙面の都合により註記省略

〈参考文献〉

浅野教信「法然上人の証果観について」(『真宗学』三五・三六合)
加藤義諦編『安心決定鈔について』

〈キーワード〉 現益、如来と等し、法然、親鸞

(龍谷大学大学院)